

(2) 本学における学生調査の目的

本学の本調査は、上記の形態でいえば後者に属し、機関独自の問題意識を背景に設計・実施された。本調査の目的は、共通教育段階における鹿大生の学習実態やそこで獲得された学習成果の状況を、学生自身の主観的評価を通して明らかにすることであった。特に、FD委員会が実施組織となっていることから、本調査で得られたデータを踏まえてFD活動の企画・実施を行い、教育改善に関する意思決定を行うのに資するデータを捕捉することを目指した。

FD(Faculty Development)とは文字通り、ファカルティ(教授団)の資質や能力をディベロップ(開発)することであるが、近年FD先進国ではEducational Development(教育開発)という用語も多く使われるようになり、大学教育の改善に向けた取組みを広く網羅するようになっている。そうしたトレンドをみても、全学的にFDを担う組織が広く教育改善に資するデータを収集・整理・分析して、企画や意思決定に活かすことは重要な意味をもつ。このことはもちろん、意思決定のプロセスにおいて、当該機関の組織文化を知悉する個人の経験や皮膚感覚が発揮されることの重要性を否定するものではない。しかし、そうした経験や感覚が独善的にならず十全に機能するためには、もう一方の手でそれらを裏打ちする種々のデータをしっかりと捕捉しておくことが重要である。その意味で、FD委員会が教育活動に関するIR機能を有することは大きな強みにもなり得ると考えている。

2. 調査実施プロセス

(1) WGにおける準備作業

具体的な実施状況は以下のとおりである。

平成22年7月のFD委員会において重点経費の配分が決定され、本調査の実施が了承された。それを受けて、ワーキンググループ(WG)の人選を開始した。メンバーは、FD委員に加え、高等教育研究開発部や外国語教育推進部委員、さらには高大接続担当学長補佐や共通教育係長など広く関係者に依頼した(表1参照)。それと合わせて、グループ内のコミュニケーション・ツールとしてメーリングリストも整備した。実施に係る総合的な調整作業は教育推進係が当たった。

表1 本調査ワーキンググループ(平成22年度)

氏名	所属
杉本 和弘	教育センター(FD委員、高等教育研究開発部会委員)
溝口 和宏	教育学部(FD委員)
金岡 正夫	教育センター外国語教育推進部(外国語教育推進部会委員)
加藤 龍蔵	工学部(高等教育研究開発部会委員)
浅野 敏之	高大接続担当学長補佐
吉村 学	教務課共通教育係
大園 豊美代	教務課教育推進係

同年9月に第1回WGを開催し、調査票案に関する検討を開始した。10月13日・14日にはWGメンバー3名(杉本・金岡・大園)が、先駆的に学生調査とFD活動とのリンケージに取り組んできた島根大学教育開発センターに対する訪問調査を実施した。同センターの山田剛史准教授から同大学における取組状況や成果についてヒアリングを行うとともに、本学の調査票案に対する意見交換も行った。

調査票は大きく、「基本情報(学籍番号を含む回答者の属性)」「学習行動に関する質問」「学習成果に関する質問」「学習環境に関する質問」「正課外活動に関する質問」で編成し、それを構成する質問項目については、WGやメーリングリストでの議論、FD委員会での議論を踏まえて修正を加えていった。最終的には、12月開催のFD委員会において、調査票の内容及び平成23年1月の実施に関して了承がなされ、晴れて実施の運びとなった。

(2) 実施状況

本調査の実施状況は表2のとおりである。回答率は水産学部が60%台でやや低かったものの、調査期間を平成23年2月まで延期したこともあり、全体ではほぼ80%が達成されて十分なサンプル数を確保することができた。技術的には、2年生後期はほとんどの学部で専門教育が始まっており、クラス単位で行われる1年次の英語のような授業がないため回収に困難が予想されたが、結果的には高率の回答率となった。

こうして高率が達成し得た背景として、FD委員長でもある教育担当理事からの、いい意味でのトップダウンが機能したこと、調査票の配布・回収を担われた各学部のFD委員や学生係の尽力が得られたこと、調査票の分量がA3見開き2ページで、学生の作業負担が比較的軽量だったことなどが複合的に奏功したと考えられる。そうした側面から見れば、本調査の実施システムは成功事例といえ、今後、全学横断的に教育改善の取組みを進める上での一つのグッド・プラクティスとしても位置付けることのできる取組みとなったといえる。

他方で、平成22年度は本調査の設計・実施が中心作業となり、調査結果の整理・分析・広報、さらに調査結果を踏まえた教育改善の取組みまでは至らなかった。これらは23年度以降に実質化する方向で進めている。

表2 本調査の実施状況

学部	学部有効回答者数/2年生 (H21年度入学)	有効回答率
法文学部	325 / 410	79.3%
教育学部	220 / 288	76.4%
理学部	138 / 187	73.8%
医学部	194 / 214	90.7%
歯学部	51 / 54	94.4%
工学部	321 / 398	80.7%
農学部	202 / 245	82.4%
水産学部	93 / 140	66.4%
合計	1544 / 1936	79.8%

3. 今後の課題

本調査は、鹿児島大学が提供する大学教育の質保証を進める上で重要なツールとなり得る可能性を有している。しかしその真価は、本調査から得られたデータを「いかに活用して実質的な教育改善につなげられるか」という点にかかっている。今後、以下の課題に対処していくことが必要だと考えている。

第一に、すでに述べたとおり、本調査結果の分析を進めることである。その際、入試形態やGPAといった他の教務データとのリンケージを行い、学生の学習状況に関するより深い理解につなげることが必要であろう。その上で、分析結果を教育改善における実際の活動に活用することである。前述の通り、本調査は冒頭に学籍番号の記入欄を設けており、他のデータとリンクさせることが可能な設計となっている。この利点を十分に活かすことが求められる。

第二に、本学における本調査の循環的・継続的实施に向けた体制強化である。そのためにも、調査の有用性に関する学内の認知を得ることが今後の課題である。さらに、学生や父兄を含めた学内関係者に広報していくこと、教職員が共通のデータをめぐって議論し協働し合う環境を醸成していくことが必要となろう。そのなかで、執行部企画評価機能といかにリンクしていくかということも課題になってくると考えられる。

第三に、将来的には学士課程教育全体を視野に取めた学生調査を設計していくことが重要である。今次調査の達成目標は、共通教育段階までの入学後約2年間の学習状況・学習成果を明らかにすることに限定した。今後は、他の教育段階も含み込んだ調査(新入生調査、卒業生調査、卒後調査)を設計・実施し、学士課程教育の入口から出口までの学びの伸びを明らかにできる総合的な調査にしていけることが求められるだろう。

鹿大版FDガイド

鹿大版FDガイドの作成

1. 平成22年度新規の企画として

平成22年度のFD経費は、例年全学の事業として実施している企画及び各部署に配分している経常経費の他に、あらたに重点経費(20%)を設け、全部局に企画の公募を行った。

第3回FD委員会における重点経費の申請は、法文学部・教育学部・桜ヶ丘合同・水産学部・司法政策研究科・臨床心理学研究科からの6件と全学企画が1件で、その中で法文学部から申請のあった事業が「授業改善のためのティーチング・ティップス集作成のための予備調査」である。また、重点経費に関連して、教育センター委員から平成22年度計画によるFD事業(案)が提示されたが、その一つに従来、不定期に作成してきた「FDニュースレター」の廃止と「鹿大版FDガイドの作成」が挙げられていた。

第4回FD委員会で、申請のあった重点経費の各事業について検討・調整を行い、①通常行っているFD活動では実施できない内容の企画を優先する、②全学で実施可能な企画は各部署の企画を取り込んで実施する、等を基本的考えとし、各企画の査定並びに全学企画の見直しを行った結果、重点経費の配分が了承された。前述した法文学部の「授業改善のためのティーチング・ティップス集作成のための予備調査」は、「鹿大版FDガイドの作成」として全学企画で取り組むこととなった。

2. 概要、期待される効果

授業改善・学生支援・学習支援の向上に資する事項(ティップス)をテーマごとにまとめたガイド[A4一枚(表裏)]を定期的に作成し、本学の構成員に配付する。

本学における授業改善や学生支援に役立つ情報(授業実践上のティップス)やデータを簡潔にまとめ、全教員に配付(及びサイトへのアップロードによる公開)することで、実践課題の改善につなげることを目的とする。

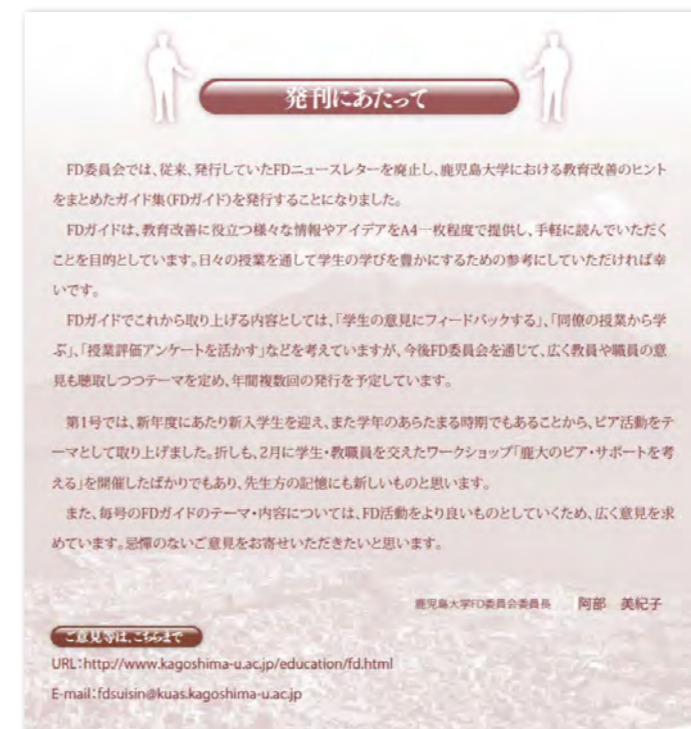
3. 作成までの経緯

「鹿大版FDガイド」作成の採択により、従来、発行してきた「FDニュースレター」は廃止されることになり、それに伴い、今年度当初に「FDニュースレター」担当となっていた3名の委員に加えて、法文学部委員並びに教育センター委員が第1号作成に携わることとなった。

以後、先行して取り組んでいる他大学の調査等を行っていたが、2011年2月より、教育センター高等教育研究開発部の伊藤委員が中心となって、第1号の原案作りに取りかかった。

日程	実施内容
2011年2月下旬	第1号テーマ、原案の提示
2011年3月上旬	訪問調査(千葉大学、久留米大学) → 修正案の提示 → 担当FD委員で検討
2011年3月中旬	FD委員の意見聴取、FD委員会了承
2011年4月上旬	第1号・表紙の印刷完成、全教員に配付

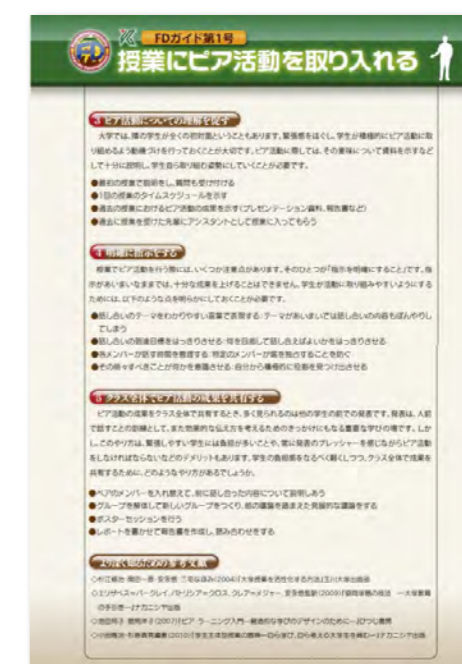
4. 発行にあたって



5. 今後の取組み

FDガイドは、平成22年度以降も毎号テーマを検討しながら、継続して第2号、第3号と発行していきたいと考えている。毎号のテーマや内容については、可能な限り、教職員の要望に応えるとともに、近年の動向や本学の状況に合わせて取り上げていく予定である。新たにFD専用のメールアドレスを設定したので、ぜひ活用していただきたい。

更に、平成23年度はFDガイドを綴じる専用ファイルの作成を検討しており、全教員に配付の予定である。



教育センター高等教育研究開発部の FD活動(共通教育)

1. はじめに

平成22年度の共通教育に関するFD活動を行うに当たり、昨年からの引き継ぎ事項として、①教養教育オープンクラスの企画・実施、②共通教育科目の授業公開・授業参観の企画・実施、③共通教育における授業アンケートの企画・実施と結果の開示、④授業改善報告書の提出率の向上と提出による改善状況の把握及び結果の開示、⑤授業アンケートの結果と授業改善報告書の記述内容を踏まえた教育改善の推進、という項目が挙げられていた。これらの事項を念頭においた上で、平成22年度の活動として、昨年と同様に、各期において受講生を対象としたアンケート調査(中間授業アンケート)と学期末授業評価アンケート、授業担当者には学期末授業評価アンケートの調査結果を踏まえた授業改善報告書の提出を求めた。また、学内の教員を対象とした共通教育科目の授業公開・授業参観の企画と実施およびアンケート調査を行った。さらに、後期の共通教育科目の授業公開・授業参観の実施期間中に、学外者を対象としたオープンクラスを実施し、併せて新任教員を対象としたFD委員会主催の新任教員FD研修会の企画として後期の共通教育科目の授業公開・授業参観を実施した。

中間授業アンケートに関しては従来の質問紙による調査方法からmoodleを活用した調査を推奨し、その実施率についてのデータの蓄積を行った。学期末授業評価アンケートとオープンクラスの企画・実施については、それぞれ部会委員でワーキンググループ(WG)を組織し、内容の充実に向けて取り組んできた。学期末授業評価アンケートに関しては、前年度に授業改善報告書等に記載された要望を踏まえ、国内外の資料を参考に授業評価というより授業改善に資することを主な観点とした新しいアンケートの作成と実施を目指してWGを中心に取り組み、授業改善に資するためのアンケートとして原案を作成し、高等教育研究開発部会での承認を得るに至った。しかし、アンケート項目を検討する中で、その内容の変更に伴って中間授業アンケート、授業改善報告書等についても質問項目、実施方法、時期を検討する必要性を感じ、新しいアンケートの提案には至らず、次年度に引き継ぐこととした。

今年度は、前年度に本部会で実施された企画を踏襲しながら、若干の工夫や新しい試みを行いながら実施した。ここでは、企画の実施内容およびアンケートの結果について報告する。

2. 中間授業アンケート

学生への中間授業アンケートは、前期は5月17日、後期は11月16日から約1カ月間、授業担当者に依頼して実施した。中間授業アンケートは、その結果を受講している学生に反映することを考慮に入れて授業期間の途中に行われているものであり、また、自由記述の欄が設けられているものの質問内容が短く、回答形式がチェックによるものであることから、入力、集計を行うにあたりmoodleが有効に活用できる。教育センターでは、中間授業アンケートの実施にはmoodleを活用することを推奨しており、昨年後期からアンケートの方法別に実施状況を調べている。平成21年度と平成22年度の実施状況について後期に関して比較し、表1に示す。今年度は教育センターで用意したアンケート用紙を使用した担当者の授業数は平成21年度と比較して55科目減少し、アンケート用紙の配布数も平成21年度16,980枚から平成22年度10,443枚とかなり減少していた。moodleを活用した授業は34科目増加していた。しかし、全科目数から考えると、いまだ紙媒体を使用している授業担当者が7割であり、集計結果を迅速に授業改善に生かすためにもさらに入力のデジタル化が促進されるよう部会としても方策を検討する必要があると思われる。

実施方法	年度	平成21年度		平成21年度	
		科目数	割合(%)	科目数	割合(%)
教育センターのアンケート用紙		328	84.8	273	70.7
教員独自の用紙		10	2.6	23	6.0
moodleでの実施		47	12.1	81	21.0
その他		2	0.5	9	2.3
計		387	100.0	386	100.0

3. 授業公開・授業参観

3-1. 学内の授業公開・授業参観

学内教員に対する共通教育科目の授業公開・授業参観を、前期は6月28日(月)～7月9日(金)に、後期は10月25日(月)～11月5日(金)に実施した。前期は、参加者がのべ18名で、参観の行われた科目数は、教養科目7科目(うち推奨科目4科目)、外国語科目4科目(うち推奨科目2科目)、基礎教育科目5科目(うち推奨科目1科目)の計16科目であった。後期は、参加者がのべ53名で、参観の行われた科目数は、教養科目6科目(うち推奨科目4科目)、外国語科目5科目(うち推奨科目2科目)、基礎教育科目3科目(うち推奨科目2科目)の計14科目であった。53名のうち35名は新任研修の一環である授業検討会への参加者であり、それ以外の共通教育科目の授業参観者は前期と同数であった。学生の授業アンケート結果を基に推奨科目を提示しているが、参観された授業の約半数は推奨科目であった。

3-2. 教養教育オープンクラス

(1) オープンクラスの概要と実施状況

オープンクラスは高校生以上の一般市民を対象として、共通教育の授業および学内の施設を学外に広く公開し、本学の教育活動全体を市民の視点から点検してもらうことによって教育改善を図ることを目的として実施している。

事前準備および企画・実施にあたり、ワーキンググループを組織してオープンクラス企画会議を5回開催し、高等教育研究開発部会に提案する内容の検討を行った。参加者の募集に当たっては、ポスターを作成し、南日本リビング新聞社および南日本新聞「みなみのカレンダー」への掲載依頼、市内書店5店舗、鹿児島市内公共施設および高校へのポスターの送付、各学部へのポスター掲示の依頼と大学ホームページ(HP)への掲載、さらに昨年参加者へのダイレクトメール(DM)の送付等を行った。また、今年度は、昨年度の参加者からの意見を踏まえ、学生サポーターを募集し、オープンクラス参加者と学生が触れ合う機会を設け、大学の状況をより深く知ってもらえるよう配慮した。募集に当たり、ボランティア支援センターの協力をいただいた他、各学部へ募集案内の掲示依頼、ボランティアサークルへの依頼、ボランティアに登録している学生へのメール配信等を行った。北辰蔵、中央図書館、総合研究博物館、キャンパス史跡めぐりを、それぞれその内容に詳しい方に説明を依頼した。最終日には、共通教育棟3号館の学生交流スペースを会場として学生サポーターを含めた交流会を企画した。

平成22年度の公開授業科目は、昨年度のアンケート結果を基に、教養科目9科目、英語科目10科目、基礎教育科目9科目を推奨科目として表記し、科目選択の際の参考とした。その他、鹿児島大学郡元キャンパス内の施設見学を企画した。平成22年10月25日(月)～10月29日(金)に表2の時間割に従って実施した。北辰蔵、中央図書館、総合研究博物館、キャンパス史跡めぐりには、それぞれ5～7人の参加があり、さらに部会委員が同行し、各施設および史跡について説明を受けた。最終日の交流会では、センター長の挨拶の後、テーブル毎にセンター長を始めとして部会委員4人と学生4人、参加者7人との懇談が和やかに行われ、後半は参加者から本企画および本学に対して意見が述べられた。

表2. オープンクラスの時間割

	10/25(月)	10/25(月)	10/25(月)	10/25(月)	10/25(月)
1限	授業1	授業1	授業1	授業1	授業1
2限	授業2	授業2	授業2	授業2	授業2
昼休					
3限	授業3	授業3	授業3	授業3	授業3
4限	授業4	図書館 見学	授業4	授業4	博物館 見学
5限	授業5	北辰塾 見学	授業5	授業5	キャンパス 史跡めぐり

(2)オープンクラスに関するアンケート調査の結果

一般市民参加者数は、35人でアンケート提出者は29人であった。授業聴講アンケートを提出した授業担当教員は28人であった。

参加者を対象としたアンケートより、本行事を知った契機については、新聞4人、書店ポスター 1人、公共施設2人、HP2人、DM19人、情報誌0人で、その他に知人の紹介が2人とインフォメーションセンター 1人であった。これからも参加したいかという質問に対して15人が「積極的に参加したい」、12人が「時間があれば参加したい」と答えていた。参加の理由として、「次回の公開授業の参考にする」、「公開授業に無い科目があった」、「公開授業に関連する科目があった」、「公開授業の会場を利用している」、「科目自体に対する興味があった」、「鹿大、学内施設、講義への興味があった」、「時間の有効利用するため」、「知人に紹介された」、「大学で学ぶことを社会に役立てる」、「また勉強したい」、「意見交換したい」、「今後の人生に生かせそうな授業を聞いてみたい」、「生き甲斐を求めたい」、「鹿大の企画にはいつでも参加したいと思っている」等が挙げられていた。自由記述では、「よかった。楽しかった。貴重な体験ができた。また参加したい」、「学生ボランティアの方々がさわやかな対応してくれた」、「もっと広く一般公開してほしい」、「オープンクラスに参加することによって次回公開講座を選択する参考になる」、「鹿大の施設や伝統を大切に保管してほしい」、「色々な施設をできる限りオープンクラスで公開してほしい」、「オープンクラスに参加の多かった科目は公開講座にしてほしい。学食は席を増やしたほうがよい」、「学生ともっと意見交換できる時間がほしい」、「慣れるまで場所が分からず、掲示板も分かりにくい」、「緑が多く活気があるが、運動場の電車通り沿いに放置されている車等は気持ちのいいものではない」等の意見が記されていた。参加の理由は大学に対する興味や個人的な大学での生涯学習につながる企画として捉えている参加者がほとんどではあったが、自由記述において、大学の施設や環境整備に触れた内容も書かれていた。また、最終日の交流会においても参加者から参観した授業に対する意見も出され、学内のアンケートでは得られ難い市民の視点からの意見を聞く機会となった。また、今年度は昨年要望されていた学生と触れ合う機会を設けたところ、参加者から好評を得た。授業聴講については、58科目に対して聴講希望があり、44科目に対してアンケートが提出された。

授業担当者に対してもアンケートの提出を依頼し、3項目の質問について記述による回答を求めたところ、28科目の授業担当者からアンケートが提出され、以下のような意見が出された。

① 工夫したほうがいい点

- より丁寧で分かりやすい講義を行う
- 大学としての社会経験との結びつき
- 双方向授業
- テキストの補助になるような資料等を利用
- 適度な緊張感を保つ
- 会話の楽しさを重要視
- 学生に対しても極力丁寧な言葉を使う
- 毎回講義内容の目的を説明、紹介する
- 一般聴講者にも理解しやすく、納得できるよう授業を組み立てる意職を持つ

② オープンクラスへの意見

- 学習意欲のある学外者を受け入れることは学生に良い刺激を与えると思う
- 聴講者の意図と授業内容のミスマッチを解消する工夫が必要
- 聴講者からの意見は今後の授業の参考になる
- 大変良い企画なので積極的に実施して欲しい
- 地域の方々に大学教育について知っていただく良い機会となる
- 地域社会に開かれた大学、生涯学習の観点から、意義あるものである
- 聴講者の熱意が伝わり、より緊張感のある授業ができる
- 公開授業の受講生につなげてはどうか
- 身近な地域について大学で正しい知識を与えることができ、地域産業振興、社会貢献に寄与できる
- 何かを学ぼうとする点で共通する者が一つの場所に集えることは大学の醍醐味のひとつだと思う
- 途中1回のみ参加という点で、聴講者の目的が今ひとつ不明である

③ 要望・提案等

- 双方向講義の実践
- 教員にテキストを自選させていただきたい
- チュートリアル制度の導入による別設定の少人数討論を授業の一環に取り入れるべき
- 学生自身に自分の意見を述べさせる工夫が必要。社会人を含めた討論の設定を積極的に位置づけるべき
- 教員、学生ともに互いの意見をもっと交換したほうがいい
- 学生には、理解するために多くを経験し、今の自分の可能性を知り、常に謙虚で柔軟な姿勢でいてほしい
- 教室設備の充実(プロジェクタとホワイトボードの有効利用、機器の掃除等)
- 教員は学生に嫌われても筋を通す(ただし傲慢ではなく大人として尊重する)ことで学生は集中する
- 全学の具体的、組織的活動の難しさを感じる。教育組織の一員としての個々の努力も必要
- 共通教育は高校教育と学部教育の狭間にあり、これらとともに解決する必要がある。原点の再確認
- 学生、教員どちらか一方に問題があれば教育効果は期待できない
- 学生の私語が他学生の集中力の阻害となり、教員の意欲を減退させる
- 教員同士が気軽に授業を参観しあえる雰囲気づくりが必要
- アンケートを頻繁にやりすぎるのはいかがなものか
- 教育の場として、学生の受講態度の悪さは問題
- 語学クラスは今の半分くらいの人数になれば更にやりやすい

3-3. 新任教員FD研修会

高等教育研究開発部会では、共通教育における教員の資質向上ならびに教育改善を目的として、共通教育科目等の授業公開・授業参観を行っている。鹿児島大学FD委員会は、新任教員に対する授業改善やFDの啓発を目的として、新任教員FD研修会を行っている。その取り組みの中で、平成22年度は、後期授業公開科目のうち新任教員担当の3科目について新任教員相互に授業参観し、授業終了後に検討会を行った。本企画をとおして、新任教員の授業改善に対する意識が高まったと考える。また、FD委員会の企画により、新任教員を対象として、FDワークショップ・意見交換会「『自ら学ぶ学生』をいかに育てるか」が開催された。参加者からは、教員同士で連携を図りながら、教育組織として教育改善に取り組む必要性が指摘された。

4. 期末授業評価アンケート

4-1. アンケートの概要

アンケートは講義用と実験・実習用の2種類があり、その設問項目をそれぞれ表3-1、表3-2に示す。設問番号が100番代の項目は受講生自身に関するもの、200番代の項目は授業に関するものである。設問番号にアンダーラインのある項目は、講義形式によって特有の設問項目である。調査は共通教育科目の受講生を対象とし、平成22年度のアンケート調査実施科目数と回答者数を表4に示す。

表3-1 講義形式の授業評価アンケートの設問項目

設問番号	設問項目(講義用)
Q101	この授業の出席状況を教えてください。
Q102	この授業についてシラバスを読みましたか。
Q103	この科目を意欲的に学ぼうとしましたか。
Q104	この授業について、1コマあたり、どの程度の予習や復習しましたか。(レポート作成を含む)
Q105	授業内容の水準は、あなたにとってどうでしたか。
Q106	この科目の学習目標(シラバスに記載)は、達成できたと思いますか。
Q201	授業内容はシラバスに沿ったものでしたか。
Q202	この授業は将来役立つと思いますか。
Q203	教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明も分かりやすかったですか。
Q204	授業は時間どおりに行われましたか。
Q205	授業に対する教員の熱意を感じましたか。
Q206	使用した教科書や教材は授業の理解に役立ちましたか。
Q207	教員は質問に丁寧に応じてくれましたか。(オフィスパワーを含めて)
Q208	授業期間中に実施したアンケートの結果は、その後の授業に反映されましたか。
Q209	この科目は全体として満足できるものでしたか。

表3-2 実験・実習形式の授業評価アンケートの設問項目

設問番号	設問項目(講義用)
Q101	この授業の出席状況を教えてください。
Q102	この授業についてシラバスを読みましたか。
Q103	この科目を意欲的に学ぼうとしましたか。
Q104	グループ実験・実習は自ら進んで行いましたか。
Q105	この科目のテーマは、時間内に終了するように設定されていますが、あなたの場合はどうでしたか。
Q106	この科目の学習目標(シラバスに記載)は、達成できたと思いますか。
Q201	実験・実習の内容はシラバスに沿ったものでしたか。
Q202	この実験・実習は将来役立つと思いますか。
Q203	この実験・実習から、講義だけでは理解できないことがあると実感しましたか。
Q204	教員の説明は分かりやすかったですか。
Q205	実験・実習は安全性に十分配慮して行われましたか。
Q206	実験・実習に対する教員の熱意を感じましたか。
Q207	オフィスパワー等で、質問に教員は丁寧に応じてくれましたか。
Q208	授業期間中に実施したアンケートの結果は、その後の実験・実習に反映されましたか。
Q209	この科目は全体として満足できるものでしたか。

表4 授業評価アンケート調査の回答数

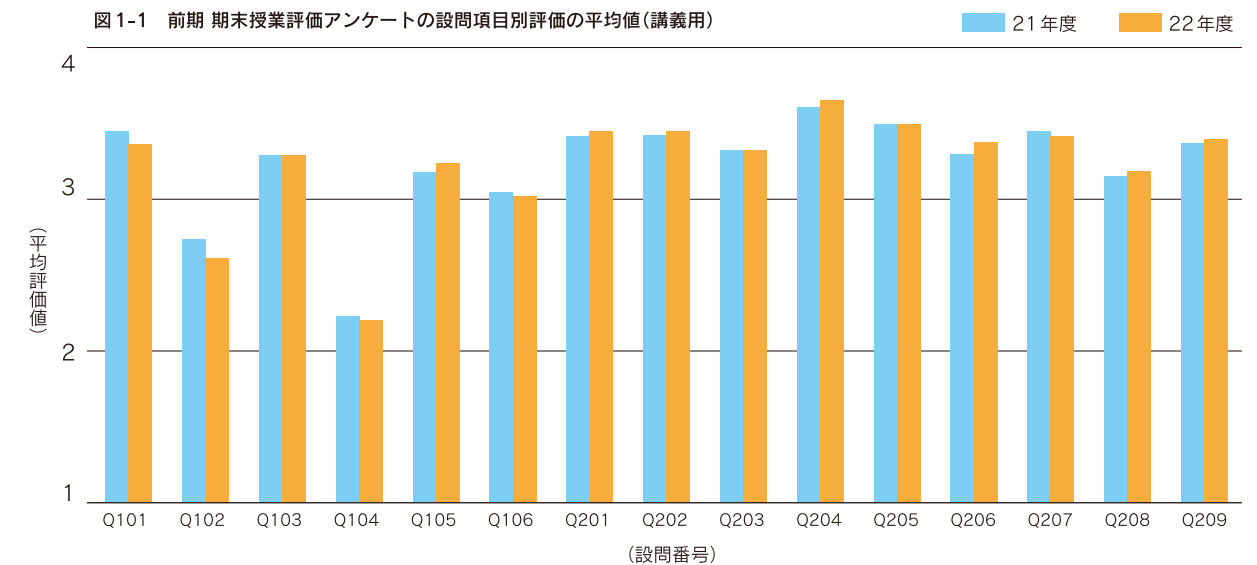
		講義科目						講義科目計	実験・実習科目			計	
		教養	情報	外国語	体育・健康(理論)	日本語・日本事情	基礎教育		教養(実験)	体育・健康(実習)	基礎教育(実験)		実験実習科目計
前期	回答科目数	120	24	171	7	6	59	387	3	27	10	40	427
	延べ回答者数	6481	1013	5577	529	47	2958	16605	3	946	599	1548	18153
後期	回答科目数	104	7	129	4	6	34	284	2	24	7	33	317
	延べ回答者数	4384	220	3190	225	61	1106	9186	4	858	156	1018	10204

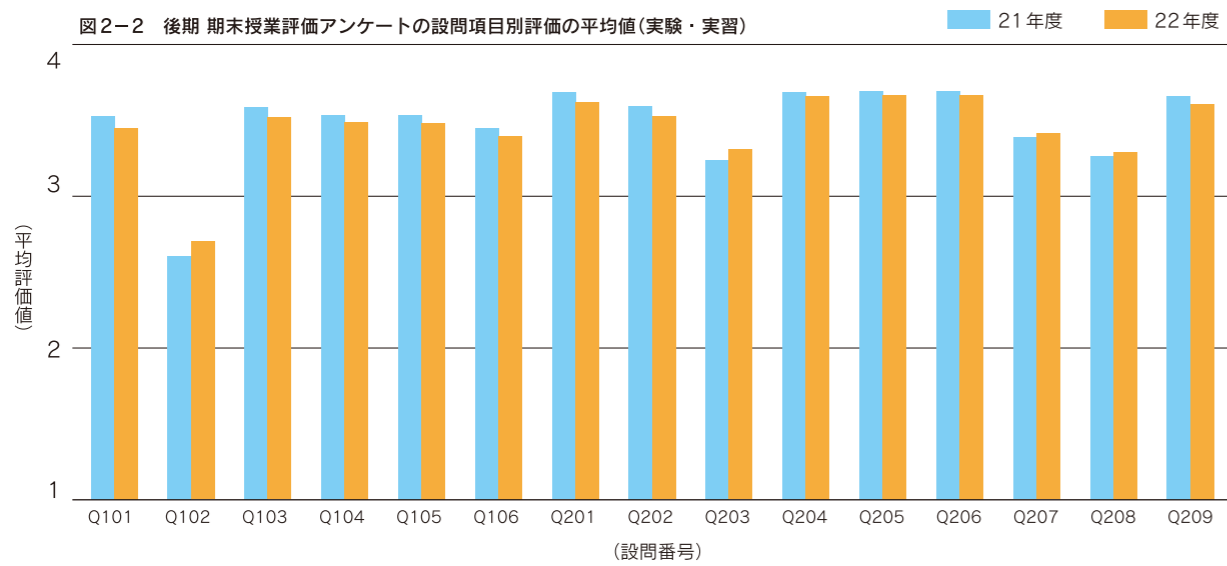
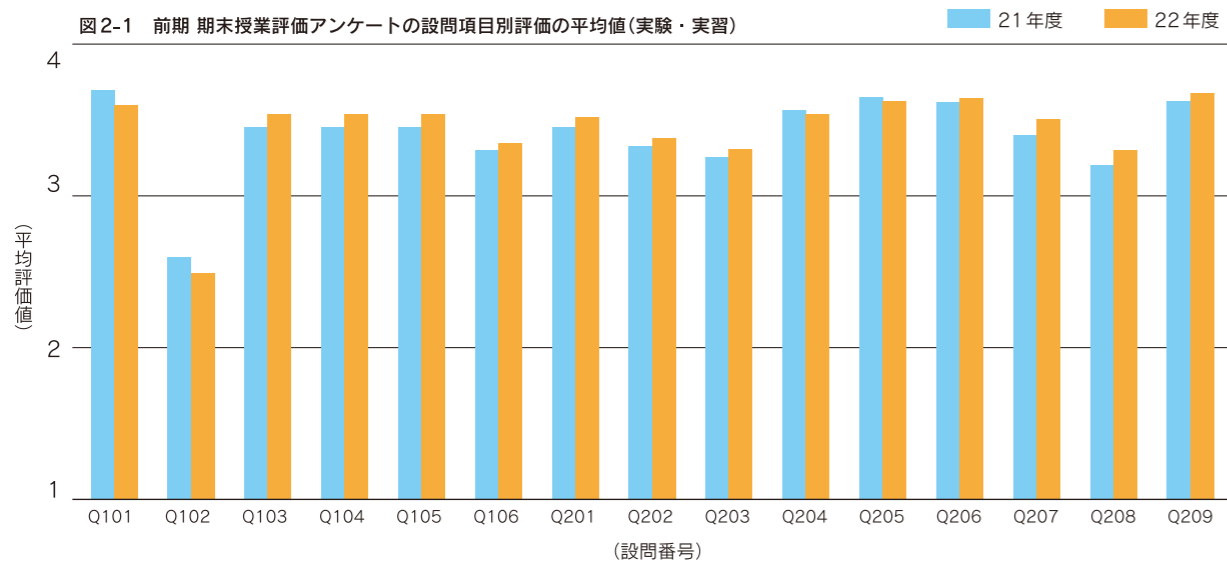
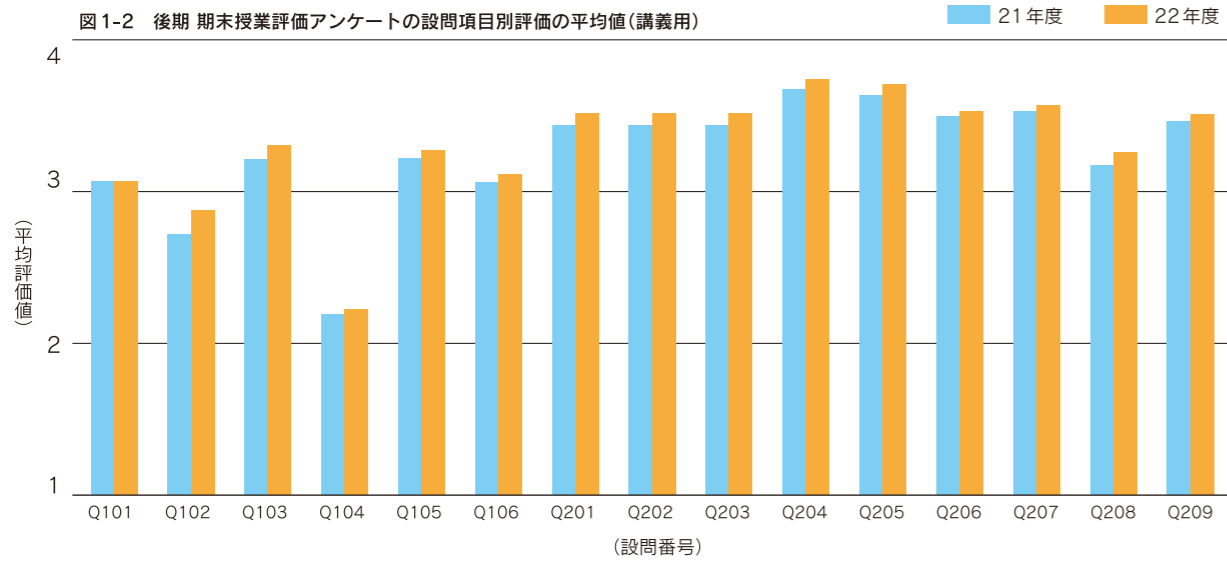
4-2. アンケート結果の全体的な傾向

平成22年度に開講された共通教育科目のうち、表4に示すように前期427、後期317の授業で受講生の評価値が得られた。各授業の受講生の評価値を平均して、その授業の評価値とした。前後期それぞれに平均した結果を平成21年度の結果とともに示す。図1-1、図1-2は、学期末授業評価アンケート(講義用)の設問項目の評価について、クラスの平均値を表している。図に示した数字は回答者の延べ人数を表す。

設問番号が200番代の授業評価に関する設問では、アンケートの内容が授業に反映されたかというQ208の項目を除いて、平均評価値は約3.5で、現在の多くの授業が高く評価されていることが窺える。Q208のアンケート内容の反映についても半数はどちらかといえばそう思うと評価していると思われるが、授業改善状況が受講生に認識できるよう、具体的な改善を行うか、または、現在の状況やその理由について学生に対して今以上に説明をしていく必要があると考える。受講生の自己評価に関しては、Q102シラバスを読んだかという設問に対して、平均評価値が約2.6で、大体または少し読んだという場合が多い傾向が見られた。Q104の1コマあたりの予習復習の時間については、平均評価値が約2.1で多くの学生は60分程度と考えられ、かなり少ないといえる。この問題の改善には受講生の学生生活のあり方や授業担当者の導き方、大学のカリキュラム構成等、様々な視点からのアプローチが必要であると考え。実験・実習科目については、図2-1、図2-2に示すように講義と同様に、授業評価に関する設問では、アンケートの内容が授業に反映されたかというQ208の項目を除いて、平均評価値は約3.5で、現在の多くの授業が高く評価されていることが窺える。Q104グループ実験・実習は自ら進んで行なったかという設問については、どちらかといえばそう思わないという評価がなされており、受講生に意欲を持たせる工夫をする必要性を感じる。この傾向は前後期ともに、また、昨年とも同様の傾向があり、改善活動の顕著な効果は認められなかった。評価値の低い項目については改善に向けて留意する必要があると思われる。

図1-1 前期 期末授業評価アンケートの設問項目別評価の平均値(講義用)





4-3. 科目分類別の傾向

表4に示す科目のうち、11クラス以上でアンケート調査が行われた教養科目、情報科学科目、外国語科目、基礎教育科目、体育・健康科目(実習)に関して分析を行なった。クラスの平均評価値の設問項目間の相関係数とその有意性を、それぞれの分類ごとに表に示し、項目間の相関から窺える傾向について、以下に述べる。

(1) 教養科目

教養科目は、前期120クラス、後期104クラスから回答を得ており、科目数も種類も多い科目群である。前期、後期の項目間の相関を、それぞれ表5-1と表5-2に示す。

意欲がある受講生の多いクラスは、授業に関する評価が高く、達成感、満足感を感じていたが、達成感より満足感を感じる傾向があった。授業の水準が高いと予習復習をする時間が長い傾向が認められた。教員の熱意が高いほどアンケートによる改善がなされていると感じており、満足感も高い。授業評価に関する設問については、授業の水準との相関は認められなかった。

表5-1 教養科目における各項目間の相関(前期)

N=120

	Q101	Q102	Q103	Q104	Q105	Q106	Q201	Q202	Q203	Q204	Q205	Q206	Q207	Q208	Q209
Q101	1		**		*	*									
Q102	0.064	1	**		**		*	**				**	*		*
Q103	0.299	0.550	1	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**
Q104	0.169	0.173	0.296	1	**		*	*	*		**	**	**	*	
Q105	0.232	0.365	0.376	0.441	1										
Q106	0.211	0.088	0.504	0.150	-0.128	1	**	**	**		**	**	**	**	**
Q201	-0.004	0.229	0.479	0.208	0.036	0.391	1	**	**	**	**	**	**	**	**
Q202	-0.009	0.274	0.628	0.232	0.007	0.507	0.704	1	**	**	**	**	**	**	**
Q203	-0.036	0.137	0.464	0.209	-0.072	0.540	0.690	0.739	1	**	**	**	**	**	**
Q204	0.053	0.012	0.313	0.046	-0.024	0.076	0.477	0.404	0.438	1	**	**	**	**	**
Q205	0.054	0.172	0.481	0.250	0.060	0.406	0.545	0.600	0.738	0.466	1	**	**	**	**
Q206	-0.014	0.334	0.481	0.276	0.123	0.306	0.616	0.623	0.615	0.424	0.523	1	**	**	**
Q207	-0.018	0.181	0.502	0.319	0.061	0.456	0.660	0.689	0.817	0.520	0.717	0.683	1	**	**

** p<0.01, * p<0.05

表5-2 教養科目における各項目間の相関(後期)

N=104

	Q101	Q102	Q103	Q104	Q105	Q106	Q201	Q202	Q203	Q204	Q205	Q206	Q207	Q208	Q209
Q101	1	**								*		**			
Q102	0.328	1	**	**	*	**	**	*	**	**	**	**	**	**	**
Q103	0.175	0.472	1	**		**	**	**	**	**	**	**	**	**	**
Q104	-0.009	0.420	0.434	1	**	*			*			*	**	*	
Q105	-0.176	0.245	0.074	0.435	1								*		
Q106	0.080	0.523	0.657	0.216	-0.008	1	**	**	**	**	**	**	**	**	**
Q201	0.008	0.299	0.509	0.188	-0.013	0.567	1	**	**	**	**	**	**	**	**
Q202	-0.054	0.212	0.665	0.140	-0.150	0.598	0.647	1	**	**	**	**	**	**	**
Q203	0.077	0.364	0.694	0.209	0.008	0.586	0.371	0.610	1	**	**	**	**	**	**
Q204	0.198	0.263	0.410	0.054	-0.002	0.414	0.663	0.447	0.416	1	**	**	**	**	**
Q205	0.148	0.426	0.572	0.149	-0.094	0.584	0.331	0.554	0.774	0.401	1	**	**	**	**
Q206	0.263	0.609	0.546	0.227	0.142	0.477	0.509	0.312	0.511	0.485	0.476	1	**	**	**
Q207	-0.001	0.355	0.705	0.316	0.185	0.524	0.631	0.636	0.649	0.563	0.541	0.656	1	**	**
Q208	0.163	0.475	0.712	0.246	-0.144	0.622	0.469	0.662	0.723	0.487	0.756	0.446	0.579	1	**
Q209	0.110	0.332	0.796	0.143	-0.171	0.708	0.589	0.771	0.829	0.521	0.752	0.558	0.703	0.779	1

** p<0.01, * p<0.05

(2) 外国語科目

外国語科目は、前期171クラス、後期129クラスから回答を得ており、そのほとんどが全ての学生が受講する必修科目である。前期、後期の項目間の相関を、それぞれ表6-1と表6-2に示す。

語学の場合、意欲は他の項目と有意な相関はあるものの、他の科目群より相関は低かった。熱意のある教員の授業は話し方が明瞭で、質問に丁寧に応じ、アンケートによって改善を行っていると感じる傾向が見られ、そのため、満足感が高い。教養科目が意欲よりも達成感を感じた場合、満足感が大きいと感じていたのに対して、語学は明瞭な話し方や質問の対応が丁寧で、役に立つと感じる授業について満足感が大きかった。授業者や授業について高く評価している場合、達成感を感じていた。しかし、授業の水準が低いほど達成感を感じている傾向も見られる。熱意のある教員の授業は将来役に立つと感じる傾向があった。語学では授業内容が役に立つことを重要視しているのではないかと考えられる。

表6-1 外国語科目における各項目間の相関(前期) N=171

	Q101	Q102	Q103	Q104	Q105	Q106	Q201	Q202	Q203	Q204	Q205	Q206	Q207	Q208	Q209
Q101	1		*			**		*				*		**	**
Q102	0.013	1	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**
Q103	0.195	0.502	1	**	**	**	**	**	**	*	**	**	**	**	**
Q104	0.092	0.349	0.221	1	**	**	**	**	**		**				
Q105	-0.087	0.344	0.306	0.441	1		**	**	**		**	**			*
Q106	0.271	0.348	0.464	0.228	-0.105	1	**	**	**	**	**	**	**	**	**
Q201	0.067	0.439	0.491	0.285	0.304	0.488	1	**	**	**	**	**	**	**	**
Q202	0.156	0.384	0.529	0.305	0.285	0.498	0.576	1	**	**	**	**	**	**	**
Q203	0.094	0.366	0.392	0.240	0.223	0.413	0.552	0.697	1	**	**	**	**	**	**
Q204	0.043	0.205	0.166	0.062	0.084	0.277	0.439	0.448	0.492	1	**	**	**	**	**
Q205	0.088	0.426	0.536	0.256	0.321	0.457	0.569	0.725	0.695	0.459	1	**	**	**	**
Q206	0.170	0.349	0.460	0.095	0.221	0.400	0.545	0.611	0.718	0.401	0.529	1	**	**	**
Q207	0.068	0.197	0.368	0.015	0.052	0.399	0.518	0.423	0.563	0.399	0.582	0.502	1	**	**
Q208	0.213	0.375	0.303	0.142	0.104	0.496	0.459	0.451	0.607	0.373	0.520	0.614	0.659	1	**
Q209	0.215	0.308	0.440	0.076	0.169	0.539	0.501	0.648	0.780	0.416	0.675	0.694	0.671	0.740	1

** p<0.01, * p<0.05

表6-2 外国語科目における各項目間の相関(後期) N=129

	Q101	Q102	Q103	Q104	Q105	Q106	Q201	Q202	Q203	Q204	Q205	Q206	Q207	Q208	Q209
Q101	1		**					*							
Q102	0.018	1	**	**		**		**		**		**			*
Q103	0.336	0.491	1	**	**	**	**	**	**	**	*	**	**	**	**
Q104	0.145	0.274	0.265	1	**										
Q105	0.127	0.156	0.309	0.379	1	**	*		**				**		
Q106	0.077	0.239	0.337	0.089	-0.340	1	**	**	**	**	**	**	**	**	**
Q201	0.053	0.172	0.239	-0.008	-0.178	0.504	1	**	**	**	**	**	**	**	**
Q202	0.207	0.374	0.573	0.026	0.015	0.276	0.410	1	**	**	**	*	**	**	**
Q203	-0.004	0.067	0.313	-0.044	-0.227	0.492	0.699	0.545	1	**	**	**	**	**	**
Q204	0.111	0.104	0.232	-0.047	0.003	0.168	0.354	0.389	0.299	1	**		**	**	**
Q205	-0.007	0.370	0.592	-0.024	0.088	0.266	0.431	0.571	0.518	0.397	1	**	**	**	**
Q206	-0.058	-0.090	0.179	-0.016	-0.120	0.346	0.610	0.188	0.646	0.103	0.333	1	**	**	**
Q207	-0.078	0.119	0.286	-0.166	-0.267	0.500	0.584	0.490	0.696	0.268	0.670	0.451	1	**	**
Q208	-0.001	0.125	0.416	-0.052	-0.128	0.390	0.556	0.535	0.671	0.357	0.568	0.479	0.610	1	**
Q209	0.049	0.187	0.453	-0.117	-0.108	0.397	0.597	0.622	0.803	0.282	0.635	0.608	0.721	0.723	1

** p<0.01, * p<0.05

(4) 基礎教育科目

基礎教育科目は、前期59クラス、後期34クラスから回答を得ており、理系の学部においてそれぞれ指定された科目を学生が受講する必修科目である。前期、後期の項目間の相関を、それぞれ表7-1と表7-2に示す。

受講生の意欲に関する項目は、全ての項目と有意な相関が認められた。授業者や授業について高く評価している場合、達成感を感じており、意欲よりも達成感を感じた場合に満足感が大きいことが窺える。熱意のある教員の授業は話し方が明瞭で、質問に丁寧に応じ、アンケートによって改善を行っていると感じ、満足感も高い。これらのことは、基礎教育科目が、専門教育に直接つながる科目であることが背景にあるのではと思われる。

表7-1 基礎教育科目における各項目間の相関(前期) N=59

	Q101	Q102	Q103	Q104	Q105	Q106	Q201	Q202	Q203	Q204	Q205	Q206	Q207	Q208	Q209
Q101	1	0.205	**			*		*							
Q102	0.205	1	**	**		**	**	**	*			**	**	**	**
Q103	0.361	0.549	1	**		**	**	**	**	**	**	**	**	**	**
Q104	0.171	0.387	0.576	1		*	*								**
Q105	0.041	-0.230	-0.050	-0.025	1	**	*	*	*			**			*
Q106	0.282	0.541	0.657	0.319	-0.495	1	**	**	**	**	**	**	**	**	**
Q201	0.175	0.472	0.655	0.320	-0.258	0.678	1	**	**	**	**	**	**	**	**
Q202	0.289	0.483	0.487	0.123	-0.272	0.657	0.503	1	**	*	**	**	**	**	**
Q203	-0.032	0.326	0.472	0.223	-0.309	0.685	0.678	0.394	1	**	**	**	**	**	**
Q204	0.147	0.170	0.390	0.230	-0.166	0.387	0.715	0.306	0.570	1	**	**	**	**	**
Q205	0.138	0.235	0.469	0.225	-0.089	0.595	0.613	0.350	0.860	0.609	1	**	**	**	**
Q206	0.048	0.335	0.383	0.232	-0.339	0.603	0.732	0.443	0.627	0.506	0.609	1	**	**	**
Q207	0.038	0.336	0.509	0.178	-0.091	0.626	0.785	0.430	0.792	0.661	0.735	0.621	1	**	**
Q208	-0.004	0.350	0.498	0.189	-0.196	0.684	0.800	0.542	0.791	0.616	0.735	0.698	0.846	1	**
Q209	0.161	0.441	0.618	0.326	-0.325	0.814	0.822	0.547	0.920	0.629	0.844	0.724	0.860	0.848	1

** p<0.01, * p<0.05

表7-2 基礎教育科目における各項目間の相関(後期) N=34

	Q101	Q102	Q103	Q104	Q105	Q106	Q201	Q202	Q203	Q204	Q205	Q206	Q207	Q208	Q209
Q101	1														
Q102	0.283	1	**									*			
Q103	0.026	0.565	1		*	**		**	**	**	**	**	**	**	**
Q104	0.329	0.189	0.069	1											**
Q105	0.123	-0.273	-0.378	0.254	1	**			*					**	**
Q106	-0.160	0.225	0.617	-0.191	-0.606	1		**	**	**	**	**	**	**	**
Q201	-0.175	0.274	0.528	0.067	-0.191	0.701	1	**	**	**	**	**	**	**	**
Q202	0.254	0.321	0.618	-0.007	-0.177	0.540	0.529	1	**	*	**	**	**	**	**
Q203	-0.075	0.291	0.635	0.003	-0.424	0.693	0.789	0.663	1	**	**	**	**	**	**
Q204	-0.257	0.263	0.550	0.147	-0.104	0.569	0.802	0.334	0.692	1	**	**	**	**	**
Q205	-0.023	0.256	0.728	0.087	-0.460	0.768	0.785	0.698	0.918	0.704	1	**	**	**	**
Q206	-0.054	0.376	0.625	0.029	-0.265	0.681	0.822	0.624	0.897	0.767	0.811	1	**	**	**
Q207	-0.187	0.181	0.522	-0.010	-0.262	0.717	0.897	0.538	0.829	0.730	0.819	0.858	1	**	**
Q208	-0.019	0.283	0.727	0.137	-0.608	0.671	0.632	0.623	0.817	0.501	0.889	0.672	0.646	1	**
Q209	-0.026	0.299	0.669	-0.016	-0.527	0.788	0.774	0.721	0.961	0.644	0.945	0.881	0.848	0.873	1

** p<0.01, * p<0.05

(5) 体育・健康科目(実習)科目

体育・健康科目(実習)科目は、体系的な学習内容を多く含む授業である。前期27クラス、後期24クラスから回答を得た。前期、後期の項目間の相関を、それぞれ表8-1と表8-2に示す。

他の4つの科目群では、授業の水準については、有意な相関は認められなかったが、体育・健康科目(実習)科目では、水準が高いと達成感があることが窺える。また、水準が高い授業では丁寧に对应してくれたと感じており、授業担当者の熱意が感じられ、質問等に丁寧に对应をしてもらった場合には満足感が高い傾向が認められた。また、将来役に立つと感じた場合、満足感が高い傾向がある。

満足感は、学生に意欲があり、教員も熱意があって質問に丁寧に对应しており、また将来、役に立つ内容であると学生が感じた場合に高い傾向があった。

(6) まとめ

共通教育科目の内容や授業形態は多岐に渡っているため、授業改善を行う場合、授業の特徴によって、内容、進め方、受講生への対応を行う必要がある。科目群別に分析を行った結果、それぞれの科目群によって学生の求めるものが異なっていることを窺い知ることができたように感じる。上記の表からは、今回読み取った内容の他にも、まだ、表から得られる知見は多いと考えられる。そのことも意識し、前期と後期ではその傾向に違いは認められなかったが、傾向の信頼性の確認の意味もあり、前後期全ての結果を掲載することとした。この表からそれぞれ担当される授業の改善に有益な知見を得ていただければ幸いである。

表8-1 体育・健康科目(実習)科目における各項目間の相関(前期)

N=120

	Q101	Q102	Q103	Q104	Q105	Q106	Q201	Q202	Q203	Q204	Q205	Q206	Q207	Q208	Q209
Q101	1				*										
Q102	0.340	1													
Q103	0.107	-0.126	1	**	*	**	**	*	*	*	*	**	**	**	**
Q104	0.170	-0.070	0.705	1	**	**	**	**		*	**	**	*	*	**
Q105	0.400	-0.331	0.422	0.518	1						**				**
Q106	0.215	0.146	0.715	0.581	0.224	1	**		**			*	*	*	**
Q201	-0.024	0.067	0.653	0.512	0.316	0.548	1					**			**
Q202	0.198	0.074	0.498	0.524	0.333	0.367	0.230	1	**	**	**	**	**	**	**
Q203	0.262	0.294	0.397	0.193	-0.051	0.599	0.164	0.533	1	**			*	**	**
Q204	0.175	-0.040	0.469	0.473	0.307	0.287	0.337	0.850	0.519	1	**	**	**	**	**
Q205	0.237	-0.105	0.470	0.742	0.554	0.377	0.302	0.715	0.343	0.687	1	**	**	**	**
Q206	-0.037	-0.188	0.685	0.686	0.295	0.436	0.531	0.785	0.336	0.780	0.686	1	**	**	**
Q207	-0.041	-0.183	0.508	0.451	0.199	0.416	0.332	0.671	0.464	0.714	0.598	0.794	1	**	**
Q208	-0.004	-0.062	0.509	0.476	0.119	0.400	0.289	0.665	0.589	0.721	0.624	0.768	0.842	1	**
Q209	0.259	-0.167	0.800	0.792	0.594	0.660	0.662	0.657	0.302	0.630	0.686	0.780	0.565	0.537	1

** p<0.01, * p<0.05

表8-2 体育・健康科目(実習)科目における各項目間の相関(後期)

N=120

	Q101	Q102	Q103	Q104	Q105	Q106	Q201	Q202	Q203	Q204	Q205	Q206	Q207	Q208	Q209
Q101	1			**	*	*	**	*	*				**		**
Q102	-0.031	1							**		**				
Q103	0.335	-0.209	1	**	**	**	*	**		*	**	*	*	**	**
Q104	0.553	-0.302	0.729	1	**	**	**	**			*	**	**	**	**
Q105	0.424	-0.343	0.463	0.558	1	**	**	**		*	**	**	**	**	**
Q106	0.424	-0.089	0.799	0.703	0.664	1	**	**	*	**	**	**	**	**	**
Q201	0.624	-0.052	0.413	0.554	0.589	0.690	1	**	**		**	**	*	**	**
Q202	0.461	-0.061	0.742	0.599	0.633	0.872	0.764	1	**	**	**	**	**	**	**
Q203	0.402	0.483	0.314	0.350	0.074	0.452	0.526	0.505	1	**	**	*	*	**	**
Q204	0.242	0.330	0.395	0.201	0.414	0.464	0.314	0.619	0.551	1	**	**	**	**	**
Q205	0.347	0.484	0.046	0.031	0.200	0.158	0.192	0.321	0.538	0.806	1	*		**	**
Q206	0.324	-0.114	0.716	0.446	0.538	0.725	0.505	0.794	0.416	0.761	0.409	1	**	**	**
Q207	0.566	-0.185	0.723	0.672	0.702	0.844	0.779	0.842	0.444	0.539	0.301	0.779	1	**	**
Q208	0.279	0.222	0.523	0.352	0.513	0.579	0.369	0.677	0.552	0.866	0.707	0.752	0.674	1	**
Q209	0.519	-0.064	0.622	0.542	0.669	0.732	0.751	0.837	0.562	0.724	0.471	0.859	0.881	0.741	1

** p<0.01, * p<0.05

5. 授業改善報告書

共通教育科目の授業担当者には、期末授業評価アンケートの結果を集計し、その結果を記入した結果シートを配付するとともに、集計結果を踏まえて、授業改善報告書への記入を依頼している。前期はアンケート実施科目数427科目のうち改善報告書の提出数は237で提出率は55.5%であった。後期はアンケート実施科目数317科目のうち改善報告書の提出数は162で提出率は51.1%であった。

授業改善報告書では、授業評価アンケート設問項目のうち、Q106「この科目の学習目標は達成できたと思いますか」、Q202「この授業は将来役に立つと思いますか」、Q209「この授業は全体として満足できるものでしたか」の3項目の評価結果について、その感想と改善方針の記入を求め、さらに、改善提案について自由記述欄を設けている。

各項目に対して、今後、実行または考慮すべきこととして提案された改善方針を以下にまとめる。

(1) 提案された改善方針

① 評価項目Q106 「この科目の学習目標は達成できたと思いますか」

- シラバスに記載されている学習目標の受講生への周知方法の検討
- 学習目標を達成させるための方策
- 学習意欲や自主的学習の喚起
- 教授内容やレベルの見直し
- 予習・復習の促進とその達成度の確認
- 学生のニーズの把握

② 評価項目Q202 「この授業は将来役に立つと思いますか」

- 具体例や身近な話題との関連性
- 実学的分野や専門分野との関係についての十分な説明
- 社会生活で必要となる自己選択・判断能力の向上をめざした授業内容

③ 評価項目Q209 「この授業は全体として満足できるものでしたか」

- 双方向授業の活用
- 受講生との積極的なコミュニケーション
- 発表会形式、ディベート形式の授業
- オフィスアワーの有効活用
- 個々の受講生の学習レベルに見合った個別指導

④ 自由記述欄

- 課題や小レポートの活用を通しての自主的学習の促進と理解度の確認
- 中間授業アンケートに記載された受講生の要望に対する迅速な対応

(2) 授業改善報告書や授業評価アンケートに対する担当教員からの意見

各項目の欄には授業改善報告書や授業評価アンケートに対する意見も記されていた。以下に代表的な意見や指摘をまとめる。

① 評価項目Q202 「この授業は将来役に立つと思いますか」

- 実社会での経験に乏しい大学1,2年生の段階で授業内容が将来役に立つかどうかの判断は困難ではないか。
- 共通教育の教育目標に照らして、将来役に立つかどうかの観点からの評価は当てはまらないのではないか。

- 大学は、将来役立つことだけを学ぶ場ではない。

② 評価項目 Q209 「この授業は全体として満足できるものでしたか」

- 授業改善のためには、受講生からのより具体的な指摘(自由記述)が必要。
- 受講生の主観的な満足度に基づく評価は、必ずしも授業改善にはつながらないのではないか。
- 単なる「満足度」は、授業の質に比例しないのではないか。

③ 授業アンケートについて

- 授業アンケートの設問項目の改善をお願いしたい。
- 平均値の推移に基づく授業改善には限界がある。学生の生の声が聴ける(自由記述による)授業アンケートをお願いしたい。
- moodleによる授業アンケートの回収率が低く、集計結果の信頼性に疑問を感じる。

④ 授業改善報告書について

- 毎年度受講生の母集団は変化するので、前年度との比較には意味がないのではないか。
- 授業改善報告書の「受講登録者数」などは、教務係で把握しているのではないか。あらかじめ記入しておいて欲しい。
- 授業アンケートの3項目の平均値を前年度と比較することが授業改善につながるのか、再検討をお願いしたい。

その他、授業改善報告書の記述には、近年、受講生の学力・理解力の低下や、学びに対する積極性の喪失が顕著であるものの、大学教育の質を確保するためには授業の到達目標を下げる訳にもいかず、その間で葛藤する教員の苦悩も読み取れる。また、受講生間の学力格差の拡大も指摘されている。この問題は多人数教育においてより対応が困難と考えられる。解決策として、現在英語科目で行われているような能力別クラス編成を要望する声も聞かれる。これらの問題は、個々の教員の授業改善により解決できるものではないことから、今後、共通教育と各部署の専門教育が連携を図りながら、教育組織としてどのような教育体系やカリキュラムを構築すべきか検討する必要があると思われる。

現行の授業評価アンケートは、大学におけるFD活動が叫ばれ始めた頃の様式をいまだ継承しており、担当教員の授業改善に資する内容とはなっていない。そこで、高等教育研究開発部会では、寄せられた意見を参考に議論を深め、できるだけ早い段階で各書式の改善が図れるよう努めたいと考えている。

6. あとがき

平成22年度は、前年度に高等教育研究開発部会で実施された企画を踏襲しながら、中間授業アンケート、期末授業評価アンケートと授業改善報告書等の質問紙による調査を実施し、学内外に対する共通教育科目の授業公開・授業参観の機会を設けた。アンケートの回答並びに授業改善報告書の作成については、多くの皆様にご面倒をお掛けしていることと承知している。しかしながら、授業公開での参観者の意見や授業改善報告書による授業担当者からの授業改善に関わる方策や取り組みに対する批評等の意見を得ることは、授業改善に役立つことと思われる。今後の授業改善を円滑に進めるためにも、これらの情報を基に次年度に向けての改善案をまとめていくことは有益と考える。既に、多くの授業担当者は個々人で授業アンケートのみならず、期末試験の結果やミニッツペーパー、受講生とのコミュニケーションなどから受講生の授業に対する生の声を聞き、授業の中で、あるいは授業が終わってから授業改善にフィードバックされていることと推察するが、現在、既に成果を上げている授業改善の取り組みがあれば、ぜひ積極的に授業改善報告書やアンケート調査の回答欄を活用して報告していただきたい。その取り組みを教員間で共有することによって、互いに教育改善に取り組む雰囲気づくりにつながるのではないかと考えている。しかし、現行の期末授業評価アンケートや授業改善報告書等の質問項目は、このような活用法に十分対応できる書式ではないと認識している。アンケート調査についても、その結果は個人レベルでのフィードバックに留まり、総合的な分析を含めた情報としてフィードバックされてはならないようにも思われる。受講生を対象とした期末授業評価アンケートでは、今年度は統計的に総合的な分析を行なうことによって科目の質や形態によって学生の求めるものや行動が異なることも見えてきた。今後は、授業評価アンケート改善のためのワーキンググループ、さらには高等教育研究開発部会が中心となって、授業改善に向けてアンケート項目の見直し、回答の分析方法の検討とその結果のフィードバックの方法等について取り組んでいく必要があると考えている。

最後に、全ての企画を行うに当たり、教育センター教育推進係職員の多大なる支援があったことを記しておきたい。

(文責：瀬戸 房子, 吉川 毅)

高等教育研究開発部会委員名簿

高等教育研究開発部長	瀬戸 房子
教育センター 高等教育研究開発部	杉本 和弘, 伊藤 奈賀子
法文学部	木村 朗
教育学部	大坪 治彦
理学部	仲谷 英夫
医学部	内尾 康人
歯学部	植村 正憲
工学部	加藤 龍蔵
農学部	小島 敏之
水産学部	吉川 毅